

ショートコメント vol.344 (2024 年 11 月 28 日)

テーマ：(2024 年の人口移動) 関西は転出超過が継続も着実に改善
～日本人の移動に限れば、通年で転入超過となる可能性も～

●2024 年の人口移動

2024 年の人口移動の大きなトピックといえば、東京への人口集中の再開が挙げられる。

外国人を含む動きをみる限り、ほぼコロナ前の動きに戻った印象がもたれる (図表 1)。コロナ禍の収束から約 2 年を経て、企業や人の移動には、コロナ禍の影響がほぼなくなったとの見方も出てきた。

ただし、日本人の動きに限っていえば、まだコロナ前を下回った状態が続いている。結局のところ、24 年の人口移動の改善は外国人に負う部分が大きく、まだ完全にコロナ前に戻ったとは言いきれない。

日本人の年齢層別の動きをみても、まだ家族層 (0～14 歳、30～49 歳の合計) は転出超過の状態にあるなど、コロナ禍に伴う構造変化は続いていると考えられる (図表 2)。

●関西の改善トレンド

一方、人口移動の改善傾向がみられるのは東京だけではなく。関西も同様に上向き傾向となっている。

ここ数年の改善トレンドの結果、まだ転出超過の状態が続いているものの、24 年は実質的に 50 年ぶりの良好な結果が見込まれる (図表 3)。

特に日本人に限っていえば、通年では転入超過が期待できそうな状況である (図表 4)。全国的に人口移動が転入超過となり得る地域は、南関東を除けば関西のみとあって、今後の 11 月、12 月の結果が注目される。

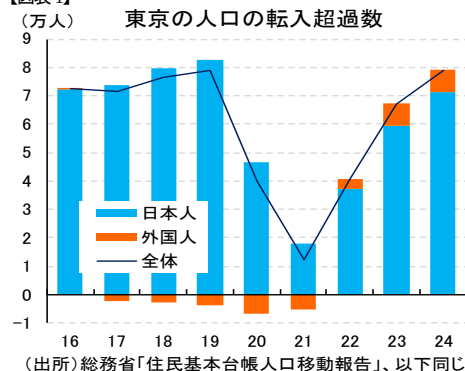
●関西の年齢別の移動状況

関西の人口移動について、日本人の年齢別内訳をみると、家族層 (0～14 歳、30～49 歳の合計) の改善が続き、転入超過を維持している (次頁・図表 5)。また、15～19 歳 (大学への入学層) の転入超過が拡大しているほか、50 代以上 (シニア層を含む中高年層) も、わずかながら転入超過となっている。

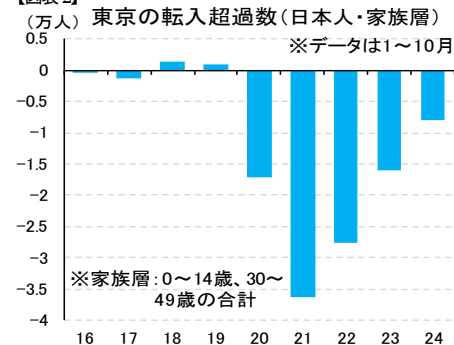
その一方、20～24 歳のいわゆる新卒層は大幅な転出超過が続いているのが、関西の大きな特徴である。

こうした動きを総合すると、就職時には関西から出ていくも

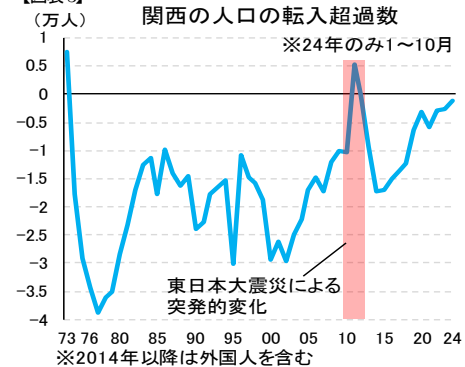
【図表 1】



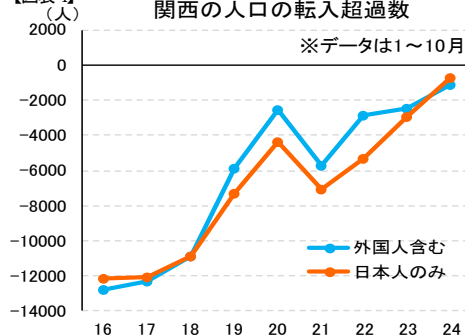
【図表 2】



【図表 3】



【図表 4】



※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。

の、家族層を中心とした住宅の一次取得のタイミング、あるいはシニアによるリタイアを見据えた、住宅の二次所得のタイミングで、関西に戻ってくる流れがイメージされる。

また、20～24歳の転出超過が、15～19歳（大学への入学層）の転入超過とほぼ相殺される点に注目すれば、地方から関西の大学に入学した後、就職時には地元に戻るといった動きも一部では想定されよう。

●関西の地域別の移動状況

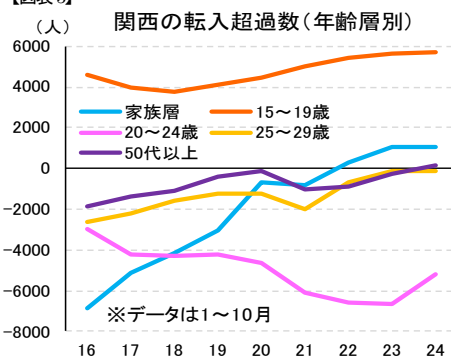
さらに関西の人口移動について、地域別の内訳をみると、対南関東では大幅な転出超過にある一方、対中国、四国、九州では転入超過を確保している（図表6）。

また、対東海でも転入超過となっている点が注目される。東海については、長らく転出超過の傾向が続いていたが、2018年頃を境に逆転し、それ以降は転入超過の動きがほぼ定着した。

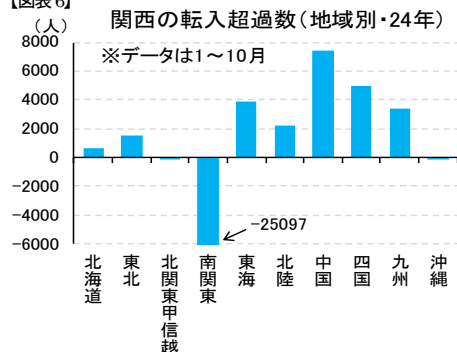
つまり、対南関東を除けば、西日本を中心に多くの地域で転入超過となるなど、関西は人口移動の面で強みをもつ地域とみて間違いない。

関西に関してはいまだに地盤沈下のイメージがつきまとうが、こうした動きをみる限り、地盤沈下はもう過去のものといえよう。11月、12月の結果次第では、日本人は転入超過となる可能性が出てきただけに、今後の推移に注目したい。

【図表5】



【図表6】



本件照会先：大阪本社 荒木秀之
TEL: 06-7668-8805 mail: hd-araki@rri.co.jp